
EUSA-JAPAN Newsletter No.41 (August, 2018)

日本 EU 学会 The European Union Studies Association - Japan

◇ 理事長メッセージ

日本 EU 学会理事長
岩田健治 (九州大学)

2018年7月、念願の地域部会が関東と関西で相次いで産声を上げました。精力的にご準備にあられた部会幹事をはじめとする関係者の皆様、まことにご苦労様でした。従来、若手研究者の登竜門は研究大会 2 日目午前に設定される分科会で、昨年の研究大会で試行的に導入されたポスターセッションが、それを補強してきました。今回の地域部会創設は、そうした挑戦の機会と頻度を飛躍的に拡大することで、若手研究者育成環境の整備を軸とする「EU 研究エコシステム」の構築に大きく資するものです。二つの部会が軌道に乗ることで、他のエリアでの部会立ち上げにも勢いが付くことを期待しております。

本年度の EUSAAP(アジア太平洋 EU 学会)年次大会は、6月 28-29 日に国立台湾大学で開催され、日本の学会理事長として参加して参りました。台湾欧州研究協会(ECSA TW)による行き届いたホストのもと、100 名を大きく超える参加者により活発な議論が行われました。日本からも 20 名を優に超える会員が参加し、現地で一大勢力を形成しておりました。これも昨年度の青山学院大学での EUASAP 開催の一つの成果かもしれません。なお、将来再び日本で EUSAAP を引き受ける際に開催校が資金面で困窮しないよう、昨年度大会で生じた余剰資金については別枠でプールしておくことを 4 月の理事会で決めております。

本年度の第 39 回(2018 年度)研究大会は、11 月 17-18 日、獨協大学での開催となります。現

在、準備委員長の大藤理事のもと鋭意準備が進められております。蓮見理事を中心とする企画委員会のご尽力により、共通テーマ「ポピュリズムとリージョナル・アクターとしての EU」のもとで魅力的なセッションが数多く組まれております。昨年度の大会に続きポスターセッションも設けられ、また二日目午後のセッションは広く市民に開放されます。多くの会員の皆様のご参加をお待ち申し上げます。

目次

- ◇理事長メッセージ……………岩田健治
- ◇アジア・太平洋地区 EU 学会(EUSA-AP)
2018 台湾大会報告
 - ・国際交流委員会……………羽場久美子
 - ・参加報告……………安田千夏子、鈴木 弘隆
- ◇学会地域部会報告……………関東部会、関西部会
- ◇EU 関連文献紹介 (2017 年度発行)
- ◇島田悦子先生を偲んで……………小島 健
- ◇澤田昭夫先生を偲んで……………八十田博人
- ◇事務局からのお知らせ
 - ・新入会員一覧
 - ・第 39 回 (2018 年度) 研究大会暫定プログラム
- ◇広報委員会から
 - ・EU 関連文献紹介コーナーのご案内
 - ・ニューズレター原稿の募集
- 【資料】2018 年度研究大会暫定プログラム

さて「EU 研究エコシステム」構築に向けて学会として知恵を絞っているところではありますが、この4月の理事会では以下の2点について合意に至りました。

第1は「EU 研究奨励賞」の創設です。これは40歳以下の若手や博士課程の学会会員を対象に『日本 EU 学会年報』に掲載された優れた単著論文の著者に授与されるものです。

第2は『日本 EU 学会年報』への投稿の常時受付体制への移行です。これは研究大会での報告を特に希望しない年報執筆希望者に対し、随時原稿を提出することができるようにするものです。他にも、なおいいアイデアがあるかも知れませんが、引き続き会員の皆様のお智恵とご協力を賜りたく、お願い申し上げます。

最後に、2018年4月に遡り編集委員会委員長が、高屋定美理事から松浦一悦理事に交代となります。高屋理事には2014年より4年間の長きにわたり、ご苦勞の多いお仕事をおつとめいただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。(2018年8月25日)

アジア太平洋 EU 学会 2018 年台湾大会

国際交流委員会より

アジア太平洋 EU 学会 (EUSA-Asia Pacific) は、EUSA の下に集うアジア太平洋地域の学術団体として、1999年12月に設立され、アジアの大学及び研究機関において欧州連合と欧州統合の研究と交流を行っています。その目的は EU 研究を促進し、アジア太平洋地域の EU 研究者と EU 加盟国との相互理解と友好協力の育成と発展を目指すものです。

現在、中国、香港、マカオ、日本、韓国、タイ、台湾、オーストラリア、ニュージーランドの10か国と地域の EU 学会が加盟しています

(EUSAAP ホームページから抜粋要約)。2004年まで本部は韓国ソウルに置かれていましたが、以後は持ち回りで年次大会が開催されています。日本では、2005年に慶應義塾大学で、昨年2017年に青山学院大学でアジア太平洋 EU 学会の大会が開催されました。

今年2018年は、台湾・台北で大会が開催され、日本からも理事長・理事・会員・若手研究者など、多くの EU 研究者が参加しました。

今年のテーマは「The Future of the EU and European Integration in the aftermath of Crises(危機の余波が続く EU とヨーロッパ統合の未来)」というものでした。

パネルは19セッションが開かれ、政治外交では、世界政治の中の EU、BREXIT 後の EU、ナショナリズムの興隆とヨーロッパ・アイデンティティ、移民・境界線問題、欧州懐疑主義と EU ガバナンスなど、経済では、EU の FTA 戦略、EU の金融・財政政策、銀行・財務ガバナンス、EU—日本経済パートナーシップ協定(EPA)、地域としては、グローバル・ガバナンスとしての EU アジア協働、韓国と EU、新たなフランスのリーダーシップの下での EU、近隣諸国政策など、多彩なパネルが出そろいました。

また若手セッションも5セッション用意され、文化・教育と欧州統合、移民・ボーダーコントロールと欧州統合、中国の EU 戦略、共通外交安全保障政策など、重要なテーマの報告が並びました。各パネルでは真摯な報告とインテンシヴな議論が積み重ねられ、充実した大会となりました。

一日目には大会委員長 Hungdah Su 氏や Europe Economic and Trade Office の Thomas Hürgensen 氏が挨拶され、また二日目のラウンドテーブルでは、まだ EUSAAP に加盟していないマレーシア、カンボジア、モンゴル、インドネシア、ベトナムなどの EU 研究者が報告され、今後アジア太平洋の EU 研究を拡大していく上で大きな意義を持つ会議であったといえます。

Closing Remarks では、若手の報告者が表彰され、組織委員会に感謝の拍手が送られるなど、とても素晴らしい大会でした。特に数年前から始まった若手セッションは、若手が積極的に国際会議での報告にアプライするうえで、とても重要な場となっていると感謝しております。

ご参加くださった皆様、ありがとうございました。来年は上海となります。ぜひ次回も、初めての方も含め、多数ご参加されますよう、よろしく願いいたします。

(国際交流委員会委員長 羽場久美子)

なお、国際交流委員会として、厳正な審査のうえ、以下の2名が今回の国際交流助成の合格者として選ばれたことをご報告いたします。おめでとうございます。

- ・安田知夏さん (東京大学大学院修士課程)
- ・鈴木弘隆さん

今後も若手研究者が積極的に国際会議での報告にアプライされ、国際交流助成に応募されますことを、奨励したいと思います。

申請は、審査・助成の関係からも、大会開催前(できれば一か月以上前)までに、添付ファイルにて国際交流委員会委員長宛てにお送りいただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

国際交流委員会委員長 羽場久美子
国際交流委員会委員 井上典之
上田廣美
安江則子

EUSA AP Annual Conference 2018 参加報告

(東京大学 修士課程 安田 知夏)

2018年6月28、29日に台湾の国立台湾大学で開かれた European Union Studies Association Asia Pacific(EUSA AP)の Annual Conference では、「危機の余波の中での EU の将来とヨーロッパ統合」というテーマのもと、ア

ジア・欧米各国から集まった EU 研究者による報告と議論・交流が行われた。ウェルカムスピーチや各国の教授によるセッションの他、2日間に渡って、ポスドクワークショップにおいて、若手研究者への発表の機会も与えられた。

ウェルカムスピーチにおいて、アジア各国における EU 研究の歴史と台湾における EU 研究の歩みが紹介され、国ごとの進歩の違いなど様々であり、一アジア人研究者として、興味深く拝聴した。また、2日目のラウンドテーブルにおいては、マレーシア・インドネシア・ベトナム・カンボジア・モンゴルといった EU 研究が発展途上である各国における状況・試み・展望などをそれぞれの国の EU 研究者から発表され、参加者らと活発な議論が交わされた。セッションやポスドクワークショップにおいては政治・経済・文化・教育・EU 懐疑主義・EU と各国の関係など、様々なトピックによる発表が行われた。例えば、2日目に行われた「新しいフランスのリーダーシップのもとでの EU」のセッションでは、3人中 2 人の研究者がフランス大統領のエマニュエル・マクロンをトピックとして取り上げており、特に香港浸会大学の Émilie Tran 助教授による報告は、マクロン政権 1 年目を新たなリーダーシップスタイルとして、取り上げ、分析しており、興味深いものであった。また、多くのセッションやカンファレンス中の研究者同士の会話などで、イタリアの新政権誕生への話題が多く取り上げられていた。

報告者自身は、ポスドクワークショップの「文化、教育、ヨーロッパ統合」というセッションにおいて、EU 機関による文化政策が、European identity をつくることを意図して行われているのかというテーマをマーストリヒト条約以降の文化政策(プロジェクト)を取り上げ、分析し、報告した。具体的には、Culture Programme など、7つの文化プロジェクト創設時の法文書などを取り上げ、帰属意識や European identity をつくることは意図されていると考えられるもの

の、定義がなされていないなど、不十分な部分もあるという指摘をした。聴衆者からの質疑応答やコメントにおいて、今回使用しなかったユーロバロメータの使用などを提案いただき、今後の論文作成において活かしていきたいと考える。

(鈴木弘隆)

筆者は、2018年度日本 EU 学会国際交流助成を受け、2018年6月28-29日に台湾の国立台湾大学で開催された EUSAAP に報告者として参加してきた。筆者の報告は6月29日13:30-15:00に開催された、Section 5A “EU’s Monetary and Fiscal Policies”にて、“EMU’s Monetary and Fiscal Policy Effects on Euro Area Future Natural Interest Rate”と題する報告をした。

筆者の報告内容を要約すると、次のようになる。EUとユーロ圏は、長期停滞懸念と低インフレの下で、ECBによる非伝統的金融政策に着手し、状況の打開を図ってきた。その評価は様々であるが、本報告では、EMUの金融政策と各国の財政政策が、ユーロ圏の将来の経済成長見込み(すなわち、長期の自然利子率)の変化に効果を持つのかもたないのか、あるいは通説と照らし、仮に持つとしたら、それは、どの程度でどのように説明できるかを、EUの公式統計を用いて分析している。財政、金融政策は長期では中立で無効であるという批判と、財政、金融政策は実質への影響を通じて有効という見方があるが、本報告では、これを長期停滞論の需要、供給サイド要因と金融レジーム転換の視点から、後者の見方に立ち、統計実証的に考察した。

報告後、討論者である台湾の moderator から貴重なコメントをいただいた。報告では時間の都合から割愛せざるをえなかったが、1、需要、供給サイド要因が自然利子率に与える影響はどうかと、2、John Williams と本報告の関連性、また、長期自然利子率に対するタームプレミアムの影響についてはどうかという貴重なコメントをいただいた。これらのコメントへの返答を

反映し、論文を修正のうえ、ジャーナルに投稿したい。

国際会議に参加する一番の意義は、報告とフィードバックを別とすれば、普段は直接会うことのできない国内外の研究者の方と意見交換できる点にある。筆者は、国際会議で研究者として活躍していくために今後進むべき進路について貴重なアドバイスを得ることができ、また、海外で活躍する研究者、実務家の方の現場での話を聞くことができ、大いに啓発された。これだけでも、筆者にとっては国際会議に参加した意義があった。

最後に、筆者は日本 EU 学会国際交流委員会による国際交流助成を受けたことで、今回の報告が可能となった。日本 EU 学会、特に今回助成をいただいた国際交流委員会の皆様に厚く御礼申し上げたい。



学会地域部会報告

関東部会

若手会員による研究報告の場を広げるために、関東部会では2018年7月7日に2018年度第1回の研究会を早稲田大学にて開催しました。

まず第1報告として大道寺隆也氏(早稲田大学政治経済学術院助手)に「EUにおける「相互信頼」の形成と揺らぎ—基本権保障をめぐる国際機構間関係—」という題目でご報告いただきました。本報告はEU諸機関の政策文書や判例などを用いながらEUにおける「相互信頼」という概念の形成と変容を詳細に分析する刺激的なものでした。刑事司法分野、とくに欧州逮捕状を事例に、欧州審議会や加盟国レベルの裁判所まで視野に収めた分析が特徴的でした。

第2報告は唐鎌大輔氏(みずほ銀行チーフマーケット・エコノミスト)に「ユーロ圏の経済・

金融情勢の現状と展望」と題してご報告していただきました。唐鎌氏の報告は実務家としての視点から現状の EU 経済の動向を精緻に分析されたものでした。とくに欧州中央銀行 (ECB) の金融政策の動きと市場の反応の検討に報告者の専門的な知見が強く反映されたものでした。

第 3 報告は鈴木規子氏 (早稲田大学社会科学部准教授) に「EU 域内移民の現状—フランスを事例として」というご報告をしていただきました。従来の移民研究の知見を EU 域内移民の現実の動きと対照させながら EU 移民の特徴を浮かび上がらせる興味深い報告でした。域内の自由移動の権利という EU 市民権の特徴が、どのように EU 移民の域内移動に左右するのかという点を現地調査の成果も踏まえて考察されました。

第 1 報告と第 3 報告に対しては土谷 (高崎経済大学) が討論を行い、第 2 報告に対しては土田陽介氏 (三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング) に討論者を務めていただきました。第 1 報告に対しては、加盟国の裁判所の判例の位置づけや欧州司法裁判所の判例解釈の妥当性を確認する質問が出されました。第 2 報告に対しては報告者とは異なるシンクタンクエコノミストの視点からなされた土田氏のコメントが報告の視点を多面的に浮かび上がらせました。第 3 報告に対しては EU 域内移動が従来の国内移動と国際移動のどちらに近い特徴を持っているのかという質問がされました。

当日は関西の豪雨で参加がかなわなかった方もいらっしゃいましたが、20 名弱もの参加者で活発な討論がなされました。また多数の参加者が懇親会にも出席してくださいました。政治、経済、社会と多様な専門分野の報告者がそろい、幅広いテーマおよび視点から議論ができたことは EU 学会の学際性がうまく発揮されたところだと思います。

2018 年度の第 2 回研究会は 2019 年 2 月に一橋大学で開催予定です。第 1 回研究会と同様に

報告者の募集を行いますので、院生やポストドクター、非常勤講師の方などからの積極的な応募をお待ちしています。詳細はまたメールおよびホームページでお知らせいたします。

関東部会幹事 土谷岳史 (高崎経済大学)

関 西 部 会

今年度 4 月の理事会において地域部会としての関西部会発足が正式に承認されました。それを受けまして、このたび第 1 回関西部会を、7 月 21 日 (土) 13 時 30 分~17 時 50 分まで、関西大学千里山キャンパスにおいて開催いたしましたので、ご報告いたします。

まず関西部会が発足した意義ですが、EU を研究している若手研究者の研鑽のための、大会以外の身近な場として、また会員相互の交流の場として地域的な部会の必要性があるとの声がありました。そのため、関西を中心とした部会として関西部会が発足いたしました。ただし、関西在住の会員のみで報告・参加を限定しておりませんので、今後、別の地域からの会員の報告・参加も大いに歓迎いたします。

第 1 回関西部会では次のような報告がありました。まず第 1 報告は佐竹壮一郎氏 (同志社大学法学研究科博士課程前期課程) より、「EU の正統性構築に向けた課題」が発表されました。第 2 報告は Porto Massimiliano 氏 (神戸大学経済学研究科博士課程: 入会申請中) より”The Rules of Origin in the EU-Japan Relation”が英語によって報告されました。

また、第 3 報告予定の梅本あすか氏 (同志社大学グローバル・スタディーズ研究科博士課程) は体調不良により、報告がキャンセルされたので、3 番目の報告としては、Agata Wierzbowska 氏 (神戸大学経済学研究科講師: 入会申請中) より “Financial stress in euro area: implications for financial integration, monetary policy, and real economy”が日本語で報告されました。なお博士課程前期課程 (修士課

程)の方や、また入会申請中の方も報告可能であることを申し添えます。

参加者は関西を中心に14名の参加でしたが、東京在住の会員も1名、ご参加いただきました。今後も、関西を中心にして、関西部会を開催していきますので、報告・参加をよろしくお願い申し上げます。

関西部会幹事 高屋定美 (関西大学)



EU 関連文献

(2017年4月～2018年3月末発行)

『現代ヨーロッパ経済 第5版』有斐閣、(2018年3月)著者、田中素香・長部重康・久保広正・岩田健治。

『危機の中のEU経済統合』文眞堂、(2018年3月)嶋田巧・高屋定美・棚池康信。

『EU共同体のゆくえー贈与・価値・先行統合』ミネルヴァ書房(2018年3月)山本直。

『東アジア共同体シリーズ第3巻、アジアの地域共同ー未来のために』明石書店、(2018年3月)羽場久美子編著。

Contemporary Issues in Human Rights Law: Europe and Asia, Springer, (2018) Yumiko Nakanishi (ed.)

『EUの揺らぎ』勁草書房(2018年2月)井上典之・吉井昌彦編著。

『スロヴェニアー旧ユーゴの優等生ー』群像社、(2018年2月)小山洋司。

『ハンガリーを知るための60章-ドナウの宝石』明石書店(2018年1月)羽場久美子編著

『欧州統合は行きすぎたのか(上)(下)』岩波書店、(2017年10月)G.マヨーネ著、庄司克宏(翻訳)

『EUにおけるエコシステム・デザインと標準化:組込みシステムからCPSへ』科学情報出版、(2017年8月)徳田昭雄。

『EUの危機と再生ー中東欧小国の視点ー』文眞堂、(2017年8月)小山洋司。

L'échange des données dans l'Espace de Liberté, de Sécurité et de Justice de l'Union Européenne, MARE ET MARTIN, Grenoble (May, 2017): Constance Chevallier-Govers (ed.), contributor: Alessandro IANNIELLO - SALICETI

『身近に感じる国際金融』有斐閣、(2017年6月)著者:飯島寛之・五百旗頭真吾・佐藤秀樹・菅原歩。



追 悼

∞∞ 島田悦子先生を偲んで ∞∞

小島 健(東京経済大学)

本年1月19日、本学会名誉会員の島田悦子先生がお亡くなりになりました。ここに広報委員会からの依頼により島田先生の追悼文を書かせていただきます。

島田先生は1930年7月にお生まれになり、東京女子大学を卒業されると同時に鋼材倶楽部に入社されました。鋼材倶楽部で海外調査課に所属された先生は、外国重工業の調査を担当さ

れました。そのころヨーロッパでは欧州石炭鉄鋼共同体(ECSC)が発足したばかりであり、先生は ECSC 加盟国のフランス、西ドイツ、ベネルクスの鉄鋼業と炭鉱業について研究を開始されます。その後、先生は名城大学、東洋大学の助手を経て 1961 年に東洋大学の専任講師に就かれました。そして 1962 年から 66 年に先生はヨーロッパに留学され主に西ドイツのフランクフルト大学経済学部において研究されました。当時日本人が海外へ行くのは旅行でさえ大変だった時代であり、4 年間ヨーロッパでの最新の研究を吸収されたことは先生の財産になったことと思います。

島田先生のご研究は、ヨーロッパの石炭業と鉄鋼業の歴史と現状を分析することによって経済統合の苦難の道と統合の歴史的意義を明らかにするものでした。まさに島田先生は我が国におけるヨーロッパ統合史研究の先駆者でありました。先生は生前 3 冊の単著を刊行されていますので、以下、それぞれの著書について簡単に紹介します。

『欧州鉄鋼業の集中と独占』（新評論、1970 年、増補版 1975 年）は、島田先生のヨーロッパ留学の成果であり ECSC の成立と ECSC による反独占政策を中心に研究されています。本書は、鉄鋼業を中心に欧州統合の展開を実証的に解明した名著です。私も本書によって歴史的視点からヨーロッパ統合を研究する方法、ヨーロッパ鉄鋼業の特質など多くのことを学びました。

次に、『欧州経済発展史論—欧州石炭鉄鋼共同体の源流—』（日本経済評論社、1999 年）では、産業革命から第二次世界大戦直後までの大陸ヨーロッパにおける鉄鋼業と石炭業の発展を実証的に検討されました。また、同書ではド・ヴァンデル、アルベットなど主要な鉄鋼企業の国際活動にも焦点を当てられ、ヨーロッパの経済統合には産業的基盤があったことを明らかにされました。

さらに、『欧州石炭鉄鋼共同体—EU 統合の原点—』（日本経済評論社、2004 年）では、ECSC 設立以降の ECSC の石炭政策、石炭共同市場の形成と発展、さらに EU の共通エネルギー政策を研究されました。2002 年 7 月、先生が主たる研究の対象とされてきた ECSC は、パリ条約の有効期限である 50 年が経過し終了しました。本書には、EU の出発点である ECSC の成果を検証するとともに、EU が取り組んでいるエネルギー政策や環境政策を明らかにしたいという先生の意志が感じられます。これら以外にも島田先生には金融政策、通貨統合問題を扱った論考があります。

島田先生は、1989 年 11 月に日本 EC 学会（当時）の理事に就任され、1997 年 11 月から 2 年間は日本 EU 学会の理事長を務められ、本学会の発展に貢献されました。私は、島田先生が開拓された経済史的手法によって EU を研究してきました。先生からは拙稿を送るたびにきれいな字で励ましのお手紙を頂戴し、暖かい心遣いに感謝しております。

島田悦子先生のご冥福を心からお祈りします。

∞∞ 澤田昭夫先生を偲ぶ ∞∞

八十田博人（共立女子大学）

2015 年 3 月 24 日、本学会の元理事長、澤田昭夫先生がご逝去された。86 歳であった。先生とはしばらく連絡が絶えており、ご葬儀が終わり、かなり経ってから筑波の西洋史学の先輩や久留米大学の児玉昌己先生からお聞きし、愕然としたものである。そのような私が追悼文を書くのは僭越ながら、学生時代から接してきた先生の多面的なお姿の一端をお伝えすることはできるかもしれない。

先生はお父様が国際連盟日本代表、叔父様が初代国連大使と外交官一家で、ワシントン生まれ、東大の西洋史学科をご卒業後、コーネルで

修士、ボンで博士というご経歴で、どこか貴族的な雰囲気があった。白髪麗しく、時に蝶ネクタイもお召しになる、お洒落な先生であったが、学問的には厳格であり、やや孤高のイメージもあった。

筑波大学では、比較文化学類や人文学類で教えられ、外国語センター長や初代の国際関係学類長も務められたが、その後、日本大学や東京純心女子大学でも教えられた。筑波時代に書かれた『論文の書き方』は、60刷を超えるロングセラーになった。

本来、先生はトマス・モアや宗教改革期を専門とする歴史学者である。筑波のヨーロッパ史概説の講義は宗教改革以降の教会史だったが、先生は敬虔なカトリックであるのに、ルターのくだりの語りがすばらしかった。先生が宗派を超えて日本ルター学会で発表された論文は、同学会の宗教改革500年記念論集にも多く引用されている。モアの『ユートピア』、アーレティンの『カトリシズム』の翻訳も貴重である。

そうした先生の歴史学で培った知見は、本学会の年報第12号に掲載された、補完性原理の原意を探った論文に充溢している。ラテン語、ドイツ語のキリスト教原典を読み解き、対訳も示した論文は、先生にしかできないお仕事であった。

先生は思想的には保守主義者を自認しておられ、大学院のゼミではソルジェニーツィンを読んだこともある。その弁舌を高く評価されていたサッチャーのブリュージュ演説は、先生が保守党の関連団体から入手されたテキストをゼミで輪読した。政治演説の傑作であり、気を入れて訳したら、厳しい先生には珍しく褒めてもらえたのを覚えている。

先生のEU観は客員をされた放送大学の教科書『ヨーロッパ論Ⅱ』に明らかで、欧州統合を人類史上の一大プロジェクトとして見ておられたように思う。その後、本邦でも欧州統合史研究の成果が増えたことは、先生の先

駆的なお仕事に応えたことになると思い。

先生のEUに対する関心はもとより、奥様で経済学博士のマルガレーテ先生の存在なくして語ることはできない。アクチュアルな問題への関心をリードするのはマルガレーテ先生で、筑波での授業も、「ヨーロッパ」の語源からEC（当時）の諸政策に及ぶ、当時としては珍しい本格的なECの講義だった。両先生は本学会で何度も報告されただけでなく、他の会員の報告にもよく質問されていた。あるとき、どういう議論だったか、先生のコメントに神聖ローマ皇帝カール5世のエピソードが出てきて、この学会ではまず出てこない名前なので驚いたことがある。

一方で、理事長時代に学会ニューズレターを創刊されたように、時代の変化にも敏感だった。

国際政治学に転じた私がこの学会で初めて報告したときは、ご夫妻で励ましてくださった。マルガレーテ先生が亡くなられた後、私が阪大の연구원になった折り、手紙でお伝えし、東京に来るときは遊びにいらっしやいご返事いただいたが、東京に戻ってから雑事にかまけて、お訪ねしていなかった。お見舞いも果たせず、本当に残念である。

先生は非常にユニークな存在であったが、それぞれの専門に習熟した研究者が集まり、学際的な研究を行うEU研究の理想を体現しておられた。わが国のEU研究の創成期に先生のような方がいたのは、大変幸運だったと思う。



事務局からのお知らせ

◇ 新入会員一覧

2018年4月の理事会で以下の方が入会を承認

されました。

	氏名	所属	分野
1.	唐鎌大輔	みずほ銀行国際為替部	E
2.	村田奈々子	東洋大学文学部	S
3.	板橋拓己	成蹊大学法学部	S
4.	梅本あすか	同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科博士後期課程	P
5.	松下俊平	九州大学大学院経済学府経済システム専攻博士後期課程	E
6.	佐竹壮一郎	同志社大学大学院法学研究科政治学専攻	P

◇第39回(2018年度)研究大会について

開催校：獨協大学

日程：2018年11月17日(土)・18日(日)

共通論題：「ポピュリズムとリージョナル・アクターとしてのEU」

本号巻末(11,12,13ページ)に資料として、2018年8月25日現在の暫定プログラムを添付いたします。ご参照ください。



広報委員会から

◇EU関連文献紹介コーナーのご案内

毎年夏のニューズレターで、前年度内に発行されたEU関連書籍の紹介コーナーを設けます。これは、会員個人の業績をお知らせするも

のではなく、あくまでも、EU研究にとっての新刊参考文献を広く会員諸氏にご案内することで、情報の共有を図ることを目的にいたします。当学会会員の執筆による、単著または共著の出版物のみ(紀要、定期刊行物等に掲載のものを除きます)に限定させていただきます。ニューズレターへの掲載は、書名、著者または编者のお名前、出版社、出版年月日のみとさせていただきます。随時受け付けますので、皆様からのお知らせをお待ちいたします。前述の情報を、ニューズレター担当広報委員までメールでお知らせください。

◇ニューズレター原稿の募集

広報委員会では、会員の皆様方からのご寄稿を常時募集しています。内容は問いません。ご寄稿いただいた原稿のニューズレターへの掲載については広報委員会にご一任をお願いします。

分量：横書き1200字程度。

期限：随時受け付けますが、ニューズレターの夏・冬年2回発行にあわせ、6月末日・12月末日がそれぞれ締切日となります。

提出先：広報委員の上田または八谷まで、下記のアドレス宛てに添付ファイル(Word)にてお送り下さい。

〒461-8641 名古屋市東区筒井2-10-31
愛知大学大学院法務研究科 上田 純子
E-mail: uejun * lawschool.aichi-u.ac.jp

〒819-0395 福岡市西区元岡744
九州大学 EUセンター 八谷 まち子
E-mail: machiko.hachiya * gmail.com

(編集後記)

学会ニューズレター、第41号をお届けいたします。今号では、学会の発展に大きな足跡を残されました島田悦子先生、澤田昭夫先生のお二人の元学会理事長への追悼文を掲載いたします。ご業績を偲びながら謹んでお二人のご冥福をお祈り申し上げます。

昨年のアジア太平洋地区 EU 学会東京大会の成功の余勢を駆ってでしょうか、今年の台湾大会には全参加者のなかで日本からの参加者が最多を数えたそうです。多くの若手研究者の参加も得て心強い思いです。同様に、若手研究者の切磋琢磨の場を学会として支援することを主たる目的にした「地域部会」が正式に設置され、早速、関東地区と関西地区での活動が報告されました。参加に地域の限定はありませんので、会員の交流の場にもなるかと思えます。

二年続きの大雨の被害やことさらに厳しい暑さに打ちひしがれそうになりましたが、ようやく過ごしやすさを感じられるようになってまいりました。皆様お元気で秋の研究大会でお会いいたしましょう。

(八谷まち子)

日本 EU 学会ニューズレター 第41号
(2018 (平成 30)年 8 月 26 日発行)
発行 行 日本 EU 学会 広報委員会
発行責任者 臼井 陽一郎
編集責任者 八谷 まち子、 上田 純子
.....

【日本 EU 学会事務局】
森井 裕一
〒153-8901 東京都目黒区駒場 3-8-1
東京大学 大学院 総合文化研究科
E-mail: ymorii*ask.c.u-tokyo.ac.jp

日本 EU 学会 HP アドレス(日本語)
<http://www.eusa-japan.org>

【資料】 日本 EU 学会第 39 回研究大会プログラム(2018 年 8 月 25 日現在)

日本 EU 学会
第 39 回(2018 年度)研究大会

共通論題

「ポピュリズムとリージョナル・アクターとしての EU」

2018 年 11 月 17 日(土)～18 日(日)

会 場:獨協大学

第 1 日 11 月 17 日(土) 開場(受付開始) 12:00～

共通論題 「ポピュリズムとリージョナル・アクターとしての EU」		
理事会 <11:00～12:50>		
ポスターセッション展示<12:00～>(解説は 11 月 18 日)		
1. 全体セッション第 I 部 <13:00～15:40> 基調報告 40 分(質疑なし) 基調報告以外の報告 各 30 分 質疑 10 分		
報告者	論 題	司会者
(1) 小川 有美 (立教大学)	【基調報告】 ^{バックスライド} 統合の逆転か、危機による統合か? —ポピュリズム時代の EU—	渡邊 啓貴 (東京外国語大学)
(2) 田中 素香 (中央大学)	ポピュリズムと EU	
(3) 小森田 秋夫 (神奈川大学)	ポーランドの「司法改革」と欧州連合	
(4) 江島 晶子 (明治大学)	EU における立憲主義とポピュリズム — 多元性・非階層性・循環性のポテンシャル	
休憩 <15:40～16:00>		
総 会 <16:00～16:20> (注:時間帯が例年と異なります。)		

2. Plenary Session II <16:20~17:50> (in English)		
EU Delegation presentation – 15 minutes		
Guest presentation 30 minutes, Discussant 10 minutes, Discussion 35 minutes		
Presenters	Topics	Chairperson
(1) TBA (Delegation of the European Union to Japan)	TBA*	Yoichiro Usui (Niigata University of International and Information Studies)
(2) Luis Miguel Poiares Pessoa Maduro (European University Institute)	European Constitutionalism and Populism	
Discussant: Yoichiro Usui	Discussion	
懇親会 <18:00~20:00>		

* 決まり次第、学会 HP にてお知らせします。

第2日 11月18日(日) 開場(受付開始) 9:30~

1. 分科会 <10:00~12:00>			
報告時間各 30 分 質疑 10 分			
区分	報告者	論 題	司会者
A 共通論題	八十田 博人 (共立女子大学)	五つ星運動の欧州における主流化の可能性	八谷まち子 (九州大学)
	小林 剛也 (財務省主計局)	英国・ドイツにおけるポピュリズムの動向とEU機関の役割・限界	
	今井 佐緒里 (ジャーナリスト)	Collective action – 非正規移民労働者を守るための欧州市民の連帯と活動、および欧州委員会の役割	
B 経済 分科会	石田 周 (立教大学)	リテール銀行業の国際化と「金融サービス政策白書 2005-2010」-信用機関の「大口株式保有」に関する規制に着目して	松浦 一悦 (松山大学)
	土田 陽介 (三菱UFJ R&C)	イタリアの銀行危機対応策の展開とその問題点	
	明田 ゆかり (オックスフォード大学セントアントニーズ)	リベラル貿易秩序の危機と日 EU・EPA: 「共通する価値の修辞から実践へ？」	

	カレッジ欧州研究所)		
C 自由論題	中村 健史 (筑波大学)	EU の対ボスニア・ヘルツェゴビナ拡大政策における手段と論理の乖離	円居 総一 (日本大学)
	丸山 真弘 (電力中央研究所社会経済研究所)	欧州卸エネルギー市場における情報の公開に関する制度の成立	
	道満 治彦 (立教大学)	EU における再生可能エネルギー「優先接続」の進化－EU 電力指令・再生可能エネルギー指令と固定価格買取制度からの示唆－	
昼食・休憩／理事会 <12:00～13:30>			
ポスターセッション(報告者との質疑応答あり)<12:00～13:30> (掲示は大会中常時)			
佐竹 壮一郎 (同志社大学・院)	EU の正統性 — 有効性の向上から正統性の構築に向けて		
梅本 あすか (同志社大学・院)	PEGIDA と AfD の関係性についての考察		
総 会 <13:30～13:45>			

2. 全体セッション第三部「ポピュリズムとリージョナル・アクターとしての EU」 <13:45～15:45> 獨協大学と共催(一般公開) パネルディスカッション・報告時間各 10 分		
報告者	論題	司会者
(1) 板橋 拓己 (成蹊大学)	ドイツにおける右翼ポピュリスト政党の台頭とその歴史的意味	小川 有美 (立教大学)
(2) 吉田 徹 (北海道大学)	フランスの有権者はなぜ EU に背を向けるのか - 欧州懐疑主義台頭の原因	
(3) 伊藤 武 (東京大学)	現代イタリアにおけるポピュリスト政党の浮上と統合懐疑主義の政治空間	
(4) 村田奈々子 (東洋大学)	ギリシャ・ポピュリズムの帰結 - ユーロ危機後の SYRIZA 政権	
(5) 盛田 常夫 (立山研究所)	ハンガリーにおける民族主義とポピュリズムの特徴－左派ポピュリズムと右派ポピュリズム	